

Title	コミュニティにおけるアクションリサーチを対象とした評価デザインと妥当性要因の考察
Author(s)	長島, 洋介
Citation	年次学術大会講演要旨集, 30: 103-105
Issue Date	2015-10-10
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/13236
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

コミュニティにおけるアクションリサーチを対象とした評価デザインと 妥当性要因の考察

○ 長島 洋介（科学技術振興機構 社会技術研究開発センター）

1. 背景

別稿(長島, 2015)で述べたように、国立行政法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター（以下、RISTEX と呼ぶ）では、平成 22 年度から平成 27 年度まで、「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域（以下、高齢社会領域と呼ぶ）にて、高齢社会が直面する課題を解決する方策の開発を、市区町村といったコミュニティを対象として推進してきた。このような一定のコミュニティの社会課題の解決を目的とする活動の特質上、研究者だけではなくマルチステークホルダーによる協働が求められ、そこで「社会課題の解決」「参加」「協働」を要件としたコミュニティにおけるアクションリサーチ(以下、C-AR と呼ぶ)による研究開発活動を推奨、推進するに至った。

C-AR に関して、高齢社会領域内にて科学的な体系化を進め、整理してきたが(秋山, 2015)、科学的妥当性といった評価基準、および評価デザインのあり方に関して、大きな課題が残っているものと考えられる。C-AR においても評価の視点は、コミュニティ活動を更にエンパワメントするための省察に加えて、他者に成果を伝達する上で重要な役割を果たすものである。そこで、高齢社会領域内での議論をベースにしながら、C-AR に求められる評価基準、評価デザインのあり方に関して、以下に論じる。

2. C-AR を巡る評価における課題

まず、C-AR の特徴をもとに、C-AR が直面する評価上の課題を整理したい。

C-AR の基本要素から、ある特定のコミュニティが抱える社会課題を如何に解決し得るかを示すことは重要なアウトカムとなる。このような地域介入の効果を検証する場合、従来の実証研究の手法を適応すると、ランダム化比較試験(RCT; Randomized Controlled Trial)による量的なアウトカム評価が主流な研究デザインとなっている。これは、客観的に偏りなく成果を示す上で、RCT は有効であるためである。成果の一般化にもつながる。

しかし、C-AR には、RCT の適応が難しい特徴が複数存在すると考えられる。

まず、因果関係の不明確さが挙げられる。C-AR は住民の参画を積極的に推奨するため、住民をランダムに振り分けること自体が難しい。このように主体性を重んじるコミュニティ実践をベースに活動を展開する上で、ランダム化は倫理的にも問題が残る上、十分なサンプル数の確保が難しい点も挙げられよう。研究開発に伴う活動とその成果との因果関係を十分に示すことは難しい。

加えて、研究デザイン上、C-AR の研究開発プロセスでは、絶えず見直しを伴う。そのため、どの時点でデータを取得するのが適切なのか、判断が困難なケースが存在する。例えば、介護予防プログラムの効果をコミュニティにて検証する場合も、C-AR では介護予防プログラムの運営を進めながら、内容を省察し変更する可能性も許容される。この場合、厳密な意味で、変更前後でどのような変更が生じたのか、変更点が有効だったのか、変更前でも同じ効果が得られたのか、その因果関係の道程は極めて困難なものとなる。

次に、コミュニティ変容のダイナミズムが挙げられる。C-AR では実施する方策の内容が絶えず変更され得ると同時に、一般の住民の積極的参画を奨励している。そのため、方策を受けたコミュニティの住民が、研究開発の手から離れた場所で活動を展開する可能性も大いにあり得る。例えば上記の介護予防プログラムの例で言えば、プログラム直後は一部の身体機能の向上に留まっていたものが、その意義を感じた参加者が個人で賛同者を募り、介護予防の取り組みがコミュニティレベルで広がりを見せたとすれば、これは大きな成果と呼べるものとなる。

このように住民が積極的に主体性を持って活動に携わる動きは C-AR の主目的において望ましいことであるが全てを予想できるものでは決してない。まさに「研究者泣かせ」とも呼べる事態である。そのため、このようなコミュニティ全体の継時的かつ包括的な変容過程を追う上

で、厳密な研究デザインでは「調査の時期」「調査の内容」において、適切に成果を伝えきれない場面が生じることも意味している。この点も、因果関係の不明確さに関連する可能性がある。

最後に、環境・文化依存性が挙げられる。一般的に実証研究の文脈では、成果の一般化を重視する。そのため RCT が重要視されるのだが、コミュニティが直面している現実の社会問題の解決を第一にする C-AR ではその地域の環境や文化といった文脈を完全に取り除くことはできない。理論的には、ランダム化による対象地区を複数設け、比較検討を行うことでクリアになる部分もあるが、実行可能性の観点から十分な比較地域を設けることは難しいだろう。

以上の観点から、C-AR に基づく成果のアウトカムに関して評価する上で、従来の実証的な観点からの評価デザインのみでは不十分な側面があるものと考えられる。

さらに、C-AR では成果全体をひとつのコミュニティに閉じられたものにせず、オープンに他地域に伝え、更なる展開を促す上で必要な波及のための要件を吟味することも重要であると考えている(長島, 2015)。このような要件を抽出するためには、アウトカムによる評価に加えて、失敗や困難事例も含めた実行プロセス全体の評価が求められるものとする。そのため、他コミュニティの参考となる要件を備えた C-AR におけるプロセスの整理手法の開発も求められることになるだろう。

また、上記のような評価行為自体、C-AR における研究開発活動の中に埋め込まれることが望ましいと考える。杉万(2006)はこれを研究的営みとして評価と呼んでいるが、コミュニティのステークホルダーにとって評価が単なる研究としてのものになると、否定的な感情を持ち、研究開発活動から距離を置かれてしまう。実践を重んじる C-AR のスタンスからすると、これは最も避けるべき状況とも言える。このような観点からすると、C-AR に組み込まれた評価デザイン自体を評価するメタ評価も求められる。

3. C-AR における評価デザインへの提言

評価の視点から C-AR が直面する課題を論じると、上記のように多層的な課題が存在するといえる。現時点で、これらの課題を包括的に解決可能な研究デザインを実証的に提示することはできないが、課題を俯瞰した中でひとつのモデルを提示し、議論のきっかけとしたい。

もともと質的研究法としての発展を見たアクションリサーチでは、質的研究の評価基準を重視する傾向にある。しかし、別稿で論じた C-AR

のプロセス(長島, 2015)および整理した評価における課題を俯瞰すると、量的な評価、質的な評価の区分に固執せず、両者を取り入れた柔軟な評価デザインの構築が必要となるのではないかと考える。Ivankova(2014)も、アクションリサーチと mixed methods(混合研究法)の親和性を論じている。また、質的研究法自体が、様々な視点を取り入れること(トライアングレーション)を許容しているが、単に相補的な関係で取り上げるのではなく、物事を深く捉える質的研究と、特定の分野に広がりをもたらす量的研究を統合することでシナジー効果をもたらす可能性がある。

このような観点から、質的研究法と量的研究法を C-AR の内容や実施体制およびコミュニティの状況に応じて、適切に配置することが重要であると考えている。課題の分析や評価における量的研究法に基づく調査の実施は、調査手法の決定、アウトカム評価に向けた項目の選択、タイミングなど事前に入念な計画を要する。こうした厳密な評価デザインでは捉えにくい部分を把握するためにも、それらの結果を考察する上で深みを持たせる質的なデータ(インタビュー・参与観察等)の収集は欠かせない。その場合、柔軟に対応可能な評価デザインを組み込むことが重要なケースもあろう。こうして両者を組み合わせることで、エンパワメント・科学的アウトカム評価・波及要件同定等の様々な面で有効な評価デザインとなると考える(図1)。

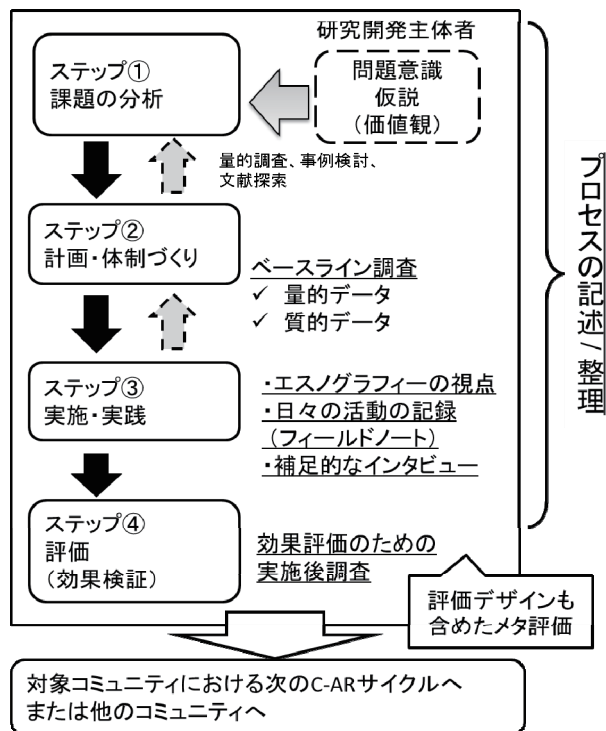


図1. C-AR の評価デザインのイメージ例

更に、このとき、特定コミュニティの課題を優先するものの、同時に研究開発主体者の問題意識、仮説、言うなれば価値観はどのようなものであるか十分に意識する必要がある。研究開発主体者もステークホルダーの一員である。主体者の問題意識がどのようにコミュニティ課題と関連するか、そこでの活動を通して主体者自身に変化があったのかも、重要な情報となりうる。

次にプロセスの記述・整理に関しては、実施事項を適切、かつ有効な形で集約する必要があるものと考ええる。その際、協働を重視するC-ARでは、取り組みの中で生じたインタラクションを如何に伝えるかが重要な要素になると考える。そこで、ある活動の担い手が誰で、いつ、どこで、どのような形でなされ、どのようなリアクション（賛同・同調・提案・批判等）があったかを提示することが必要ではないか（表1）。また、取り組みの変遷に応じて、修正箇所があれば理由・根拠を明示し、どのような対策を講じたが伝えることも求められる。

以上のように、プロセスを如何に科学的、客観的、かつ体系的に示せるかが、C-ARが学問体系として発展していくために、大きな課題のひとつに位置づけられよう。

表1. プロセス整理における基本要素例

時系列を意識した取り組みの図示化 (1)プロジェクト全体 (2)個別目標、個別グループごと (3)イベント・調査ごと  図・表(定まったフォーマットはなく、わかりやすく、適切な形で) 取り組みに関する記載事項(案) 時期(、対象地域) when-where 担い手 who 課題・目標 why 実施事項 what how コミュニティからのリアクション ※ 修正点があれば、その理由とともに述べる

参考文献・引用文献

- 秋山弘子編著 (2015) 高齢社会のアクションリサーチ：新たなコミュニティ創りを目指して，東京大学出版会
- 杉万俊夫 (2006) 質的方法の先鋭化とアクションリサーチ，心理学評論，49(3).
- Ivankova (2014) Mixed Methods Applications in Action Research, SAGE.

また、プロセスに限らず、研究成果を対外的に発信する上で誰を対象に据えるかで、提示すべきポイントが変化すると推察される。コミュニティの課題解決を目的にするC-ARの成果は、単に研究者だけではなく、実践者、または地域住民に対して成果を伝える必要がある。報告書、論文、ホームページなど、情報を提供するインターフェイスによって、強調すべき点が変わりうることも、プロセスやアウトカムを整理し、発信する上で心得ておくべきである(図2)。

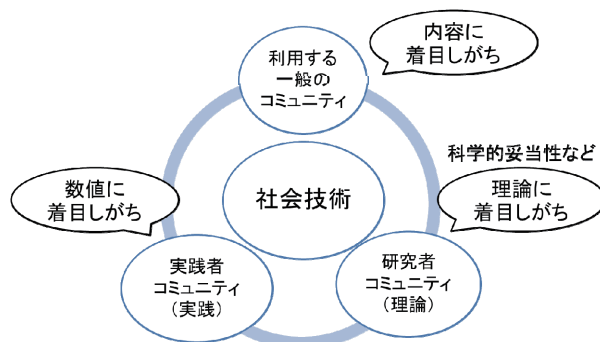


図2. 対象によって変化し得る関心

最後に、研究活動全体のメタ評価に関しては、当該活動を実施する中では、研究開発主体者として当事者の位置づけられるため、厳密な意味で客観的な立場から見通すことは難しいだろう。

C-AR事例が少ない現状では、例えば、C-ARの事例をネットワークでつなぎ、意見交換・ピアレビューのためのプラットフォーム構築もひとつの大きな可能性となろう。

4. C-ARにおける妥当性・評価基準

以上のようにC-ARが満たすべき要件から、評価デザインに関して論じてきた。全体を俯瞰することで、実証研究、質的研究の評価基準だけでは包括的にカバーできないC-AR特有の特徴が見えてきた。特にC-ARの基本要素である協働の側面は、アウトカム評価項目の検討やプロセス整理における基本要素の抽出などから、評価基準としてインタラクションとその正当性を検討すべきであるものと考えている。